

コラム 千林商店街周辺にあった映画館

小学校に入学する直前の昭和26年(1951)、千林商店街の近くに引っ越してまもなくの頃、母親に連れられて、今は「エール館」となっている「森小路公設市場」の満員の人込みの中を裏口の八百屋さんのところから外に出ると、大きな映画館の看板が目に入った。時代劇で、槍をかざした侍とざんばら髪の侠客風の男が風呂場で対峙している場面であった。映画館というものを目にしたのは初めてだったので、度肝を抜かれて、その大看板や、ガラスケースの中にいっぱい貼られたスチール写真を私は食い入るように見た。(ずっと気になっていたこの思い出の映画が、坂東妻三郎、市川右太衛門出演の『大江戸五人男』という作品だと知ったのは、それから30年後のことである)

この映画館が「千林松竹」であった。その後建て替えて「ダイエー(のちにトポス)千林店」となり、最近パチンコ屋になった。両親に連れられて何度か入ったことがあったが、総じて大人の女性向きの作品が多く、私にはあまりおもしろくなかった。

当時、男の子たちに大人気だったのは、中村錦之助(のちの萬屋錦之助)らが出演する東映の時代劇であった。それを上映する「森小路劇場(のちに森小路東映)」は、京阪森小路駅前にあった。そこと同じ経営母体の洋画上映館が、その前の道をずっと西へ、今の旭郵便局の方に向かう途中の、国道1号に出る手前、現在は1階に100円ショップが入ったマンションになっているところにあった「ミリオン座」である。この2館は、駅前の映画館の方が大きくて収容人数も多く、「東映人気」が「洋画人気」に取って代わられた1960年代には、駅前が「ミリオン座」に入れ替わっていた。

その他、千林商店街の国道1号出口(谷町線・千林大宮駅のところ)を出て、国道沿いに右に曲がった、現在パチンコ屋の「パーラー千林」になっているところに大映映画専門館の「江南キネマ」、そして、信号を渡って、大宮商店街を100メートルほど行った、現在パチンコ「天竜会館」のところに、東宝映画専門館の「大宮劇場(の

ちに大宮東宝)」があった。その裏には、大衆演劇の「寿座」もあった。

一方、京阪千林駅の近くでは、駅横のガードを潜って右に曲がり、スナックや居酒屋が並ぶ細い道を突き当たったところに、旧作邦画3本立50円が売り物だった千林劇場(のちに日活映画専門館となった)があり、さらに千林駅北の井野屋の横の千林栄通商店街を100メートルほど入った右手には、ミリオン座よりも格下の洋画三番館「千林セントラル」があった。ともに閉館後は取り壊されて、長らく駐車場になっていたが、いつの間にかマンションが建っている。そして、私が引っ越してきたあと、家の近くの、京街道と千林商店街が交差する手前の、今でも夏、かき氷のお客の行列で賑わっている「かどや」の筋向かいに、「角座」という3本立50円の格安の洋画館ができた。開館記念の招待券をもらって、『赤い靴』というイギリスの名画を家族みんなで見に行ったのを憶えている。角座は閉館後はパチンコ屋になったが、今は駐車場となっている。

他に娯楽のなかったその時代、銭湯や街角のあちこちには毎週これらの映画館の新しいポスターが貼り替えられ、夜間や休日はいつも超満員であった。まだクーラーなど付いていない時分で、真夏でも、天井に取り付けられたヘリコプターのプロペラみたいな大きな扇風機の風を頼りに、何時間も立ったまま、汗をだらだらかきながら一心不乱にスクリーンを見つめていたものである。

しかし、こんな盛況も1960年代はじめまでのことで、その後、テレビが普及するにつれて、映画館に行き座れないということは少なくなってきた。平日など、入るのが後ろめたい気さえするぐらいガラガラで、そのうち、だんだんと潰れていって、森小路駅前のミリオン座が閉館してスーパーになったのを最後に、一時は8館もあった千林界隈の映画館はすべて姿を消してしまった。

コラム 千林商店街の思い出

昭和8、9年(1933、1934)頃のことだったと思う。私は父に連れられて、千林商店街を今でいうと京阪千林駅のほうから国道1号の方角へ歩いてきた。多分年末近くであったので、例年のようにお正月の鉢植えを作る材料を買いに出かけたのであったのだろう。町はそれなりに賑わって、人通りもあったような記憶がある。通りの真ん中あたりだったか。行く手の左側に社会鍋をかけていた牧師さんの一行が見えた。そこだけが何かひっそりという感じ。「義を見てせざるは何か・・・」で父の良いのか悪いのか人助けの癖がでた。私は二重マントの中に隠れるようにして行った。いや、引きずられていった。牧師さんとの話し合いがあっ

たのか、突然父が讃美歌を歌いだした。柔らかい暖かい、それでいて厳かな歌声。いつも家で聞きなれたメロディではあるが、なんとも言えない不思議な感覚を今も忘れない。恥ずかしさと寒さでマントに隠れるように小さくなっていった私は、いつの間にか外にでて、黒山のようになった人だかりをぼんやり眺めていた。翌日、その時の牧師さんが菓子折りを持ってお礼に来られ、「ご主人はお酒を召し上がっていらっしゃったようですが」と。これは、あとで母から聞いた話である。苦笑ものだったが、困り果てるほどの父のお酒好きも、おとうよう鷹揚過ぎる母の性格も、今となっては遠い昔の懐かし思い出である。

コラム ダイエー1号店

たしか昭和32年頃だったろうか。生後1年余りの子供を背負って、まだ煩雑としていた千林駅前に日本で最初のスーパーマーケットといわれる主婦の店ダイエー(ダイエー薬局)が開店した。

これがダイエーの黎明期、いわゆる1号店である。店はそれ程広くなく、床も当初はたしか土間であったように思うが、大勢の人でごった返していた。たしか医薬品と日用品が主で、今のドラッグストアの様相であった。只珍しかったのは、今では当たり前であるが、セルフサービスキャッシュレジスターという買い物スタイルで、他店に比して廉価であった。

他店はすべて対面販売で、卵(貴重品)などおじさんが一つ一つ電燈に照らして5個ずつ新聞紙に包んで



写真■現在の様子

くれた。そんな時代であったのである。

余談であるが、千林駅より少し西に下った所の商店街の中程に高級百貨店として知られる高島屋があった。

10銭、20銭均一の店で、現在の100均の店の走りといえる。

コラム

自転車税があった

自転車税を納税した人、又は自転車には自転車鑑札かんざつがわたされた。(旧布施市の自転車の鑑札)



写真■その1

写真のアルミの鑑札を自転車のハンドルに付ける(今で言えば車のナンバープレートである)。



写真■その2

自転車から持ち主が離れる時は、真ん中の数字の所をスライドさせてはずして持って行く。それがかぎ代わりになる。



写真■その3

数字の部分がない状態で自転車を乗っていると、盗難車となりオマワリさんに捕まる。

昭和26年度市税収表 大阪市	
普通税	
市民税	77,520,343円
固定資産税	100,229,229円
自転車税	1,667,610円
荷車税	119,400円
電気ガス税	33円
『旭区政誌』より	